

平成 29 年度鳥取県高等学校学校保健研究協議会東部支部学校保健研究協議会
アドバイザー派遣事業実施レポート

- 1 研究会 鳥取県高等学校学校保健研究協議会東部支部学校保健研究協議会
2 研究テーマ 「組織的に機能する保健室経営の進め方
～保健室経営計画の作成・実施・評価を通して～」
3 日時 平成 29 年 8 月 1 日（火） 午前 9 時 50 分～午後 4 時 30 分
4 場所 国府町コミュニティセンター
5 講師 荊尾玲子氏（島根県安来市教育委員会学校教育課指導講師）
（前島根県安来市立母里小学校長）

6 内 容

○ 研修

- (1) 情報交換
(2) 県養護教諭部会への意見
(3) 分科会当日の役割分担について

○ プレ分科会 1

- (1) 研修の経緯
(2) 実践発表 ① 鳥取東高等学校 西村美里
② 岩美高等学校 尾崎祥子



(3) 指導助言

- 実践発表から、保健室経営が学校全体の取り組みになりつつある。
- 意見交換される先生方の質が高く、一人一人がバージョンアップできている。
- 「組織的に機能する」と「組織活動」がまだ明確になっていない部分がある。
- 高等学校は、保健教育ができる最後の砦である。学校の組織や関係教職員の力を借りて実践することが重要である。
- 健康課題の捉え方：データから健康課題を具体的に捉える。教職員で課題を共有することが連携のエネルギーになる。

○ 講義 「組織的に機能する保健室経営の進め方と養護教諭の役割について」

講師 荊尾玲子氏

- 健康課題の捉え方について：よりニーズが高いものを課題とする。養護教諭が人事異動で替わっても、標準的なものは変わらない。
- 保健室経営計画について：わかりやすい表現で書く。全教職員が今年これをやろうと思える計画にする。
- 評価は数値化できないものもある。子どもたちの現状についていろいろな場面で情報が入ってくる人間関係を構築しておく。
- 組織的に動くとは、連携することである。
- 私たちの実践の目的は、健康課題を解決することであり、生涯にわたって健康づくりの基礎を培うことである。



○ プレ分科会 2

- (1) グループワークの実施：参加者が3つのグループに分かれて、テーマについてディスカッションを行う。

【協議題】

- ・ PTA 組織が組織的に機能するために、あなたはどのようなことが大切だと思いますか。
- ・ 学年団・担任と組織的に連携するために、あなたは何が大切だと思いますか。
- ・ 生徒保健委員会が組織的に機能するために、あなたは何が大切だと思いますか。

- (2) グループワークの反省・意見交換

- ・ 「組織的に機能する保健室経営」について、グループワークで考えることができるような内容にする必要がある。
- ・ ワークシートを、文部科学省から平成 29 年 3 月に出た「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援 ～養護教諭の役割を中心として～」に掲載されている図を参考に考えてはどうか。
- ・ 11 月の分科会参加者が約 85 名程度になる予定であるため、8～9 グループになる。グループワークのテーマについては、グループワーク検討グループで再検討する。



- (3) 指導助言

グループワークをすることで、参加した人に感動を与え、参加した人が発言し、気づくことがグループワークのねらいである。

司会進行はしゃべりすぎないことが大切である。

[ワークショップ]

目的：人に伝えることの難しさや、人に理解してもらうための伝え方について学ぶ。

方法：2人組になり、1人が講師から出された絵を見て覚え、相手に口頭で絵を伝える。

もう一人は言われたことを聞いて絵に描く。

- 全体を通しての指導助言

- ・ チームとしての学校を意識することが重要である。
- ・ ファシリテーターが全体の様子を見ながら進めていく。
- ・ 最後に、参加者が「参加したこう感じた」とグループでの振り返りが重要である。
- ・ グループワークは、ルールとマナーを大切にす。①積極的に参加する。②一人一人の考えや思いを尊重する。③参加者の個人情報話さない。

7 まとめ

中央教育審議会答申（平成 27 年 12 月）に記載されている「チームとしての学校」をめざすために、昨年度から研究テーマを「組織的に機能する保健室経営の進め方 ～保健室経営計画の作成・実施・評価を通して～」として研究を重ねている。講師の荊尾玲子氏から指導助言をいただきながら、組織的に機能する保健室経営とは、養護教諭として何をしなければならないのか等を考え追求する機会となった。

11 月 9 日に開催される鳥取県学校保健会養護教諭部会研修会の分科会に向けて、積み重ねてきた研究内容を県内の養護教諭に伝え、共に学び合い深め合う機会となるよう、更に研鑽を深めていきたい。